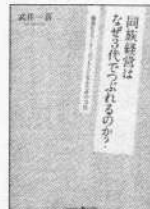


## 同族経営はなぜ3代でつぶれるのか？ 優秀なファミリービジネスになるための方法

武井一喜著（ウエルスブリッジ代表）



クロスメディア・パブリッシング  
1869円

◎評者 加護野忠男（神戸大学大学院教授）

世界の経営学者の目がファミリー企業に向き始めている。創業者あるいは中興の祖の同族が所有者であったり、経営の中核を占めている企業がファミリー企業である。数多くの研究によって、ファミリー企業の業績が優れており、長寿企業や優良企業のなかにもファミリー企業が多いことが明らかにされてきたからであった。

本書の第1章を読めば、われわれに身近な欧米のエクセレント企業のなかに意外に多くのファミリー企業があることを知ることができる。このことに驚かされる読者も多いだろう。長らくの間、上場してファミリーのくびきから脱することができた企業が本物の優良企業だというのが常識だったからである。

実際に、同族経営という言葉は因習的で閉鎖的な経営の代名詞のように使われてきた。確かに、圧倒的多数のファミリービジネスは短命である。本書は、そのタイトルが示すように、ファミリー企業に固有の経営上の難問を浮き彫りにし、その問題

### 同族経営問題、解決の実践書

を解決するための指針を示そうとした実践的な書である。

著者は名古屋の寝装具企業の4代目。著者が後を継ぐころには、同族内の対立で、その企業はすでに再生困難な状況に追い込まれていた。この会社を清算した後、著者はファミリー企業を顧客としたコンサルタントとなる。

この痛ましい経験が本書には生かされている。取り上げられている問題は身近で、ファミリー企業の関係者なら誰もが経験したことのある問題である。それらの問題への取り組みの指針も具体的で、すぐにも実行できるものだ。

本書の議論は、第2章に示されている3円（サークル）モデルをもとにしている。ファミリー、オーナーシップ、ビジネス（事業）の3つの円が重なるところから派生するさまざまな問題がファミリー企業に固有の難問だと著者はいう。ファミリーの問題と事業の問題とを別個の問題だと片付けてしまうなどという著者の忠告は示唆に富む。

## ロシアの論理

復活した大国は何を目指すか

武田善憲著（外務省課長補佐）



中公新書  
777円

◎評者 高橋克秀（国学院大学教授）

ロシアという国家、あるいはロシアの指導者が何を考えているのか。伝統的にはクレムノロジー（クレムリン学）と呼ばれる手法によって分析されてきた。プーチンとメドベージェフのタンデム（2頭）政治は、これに格好の素材を提供している。しかし、人間関係や派閥抗争に力点を置くこの手法は、物語としては面白いものの、時としてうわさの寄せ集めとなり、長期的分析には耐えられない。

本書は、ロシアの行動を内在的な「ゲームのルール」から読み解こうという新しいアプローチである。明確な方法論と率直な文体が説得力のある分析を生み出している。

ロシアにおけるゲームのルールは明文化されていない。不文律として政治文化に埋め込まれているのだが、それを知らずに行動するとプーチンの逆鱗に触れることになる。

経済分野のルールは「正しく納税せよ。そして政治に野心を抱かず、ビジネスに専念せよ」である。2003年、オリガルヒ（新興財閥）の

### ゲームのルールで大国を分析

この事件は、「決定権を持つのは大統領だけ」という当然の決まりごとを再認識させ、「資源は国家のもの」というルールを浮かび上がらせた。ロシア経済は、21世紀に入ってから資源価格の高騰でどん底からよみがえり、国力を回復させてきた。ロシアの国家目標は、天然資源から得られる利益を極大化し、国内各層に分配し、同時に社会福祉を強化して国民に生活の向上感を与えることである。国力増大は、外交のルールである「多極主義世界の追求」の力の源泉にもなっている。

ルール全体をベールのように覆っているのが、ロシア正教である。指導者は熱心な信者として振る舞い、統治の正統性と信頼性を補強している。まさに「ルールを守る限りにおいて、神の御加護を受けられる」（プーチン）である。